

# ゲシュタポの忘れ物？

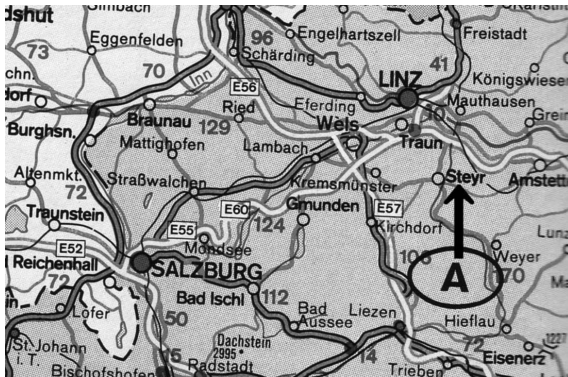
—— シュタイア実科学学校のヒトラー成績原簿の湮滅いんめつ

早坂七緒  
Hayasaka Nanao

1

「ヒトラーが政権を獲ってから、ここにゲシュタポ<sup>(1)</sup>が来て、ヒトラーの成績など彼の記録を湮滅したのだそうよ。なにしろ4とか5ばかり取っていたから<sup>(2)</sup>。不可をつけた先生なんか、報復されるのでは、と心配したとか」。校舎を案内しながらハイデマリー・コルン女史、ソロプティミスト<sup>(3)</sup>・シュタイア会員はそう説明した。まさかヒトラーが、作家ローベルト・ムージルの後輩であったとは、ここシュタイアに来るまで夢にも思わなかった。

シュタイアはオーストリアのリンツの南方にあり、エンス川とシュタイア川の合流する鋭角の台地に城や広場などをもつ、高低差に富む美しい町だ。人口は四万人ほど。中世以来刃物などの手工業が発達したが、十九世紀にヴェアンド



シュタイア（矢印）。ドイツ国境近くのBraunauはヒトラー生誕の地。



シユタイアの実科学校（現・実科ギムナージウム）。もとは司教団の建物だった。

Des Schülers		Schulgeld		Kategorie des Eintritts			
		zahlung oder leiblich u. Erlass					
Familienname Messil		I. Sem.	zahlung	Kategorie des Eintritts			
Vorname Eduard		II. Sem.					
Tag und Jahr der Geburt d. 1. Sept. 1880		Stipendium		Anzahl aus dem von diesem eingeschuldeten Zensite			
Geburtsort Olzofenbach							
Vaterland Österreich							
Religionskenntnis christlich							
Muttersprache deutsch							
Des Vaters (der Mutter)		Des Vorgesetzten		Des vereinerlichen Aufsehers			
Name . . . Eduard Messil				Eduard Messil			
Stand . . . k. u. k. Beamter				Beamter			
Wohnort . . . Olzofenbach				Olzofenbach			
(Wohnung)							
		I. Semester		II. Semester		Anmerkungen	
Allgem. Fortgangsklasse		aufh. nach Olzofenbach				Allgemein wegen Übersetzung der Eltern nach Brunn am 28. Jänner 1891 "Lina Langst"	
Ständliches Betragen		befriedigend					
Fleiß		ausgezeichnet					
Leistungen in den einzelnen Unterrichtsgegenständen:							
Religionslehre		befriedigend					
Deutsche Sprache		befriedigend					
Französische Sprache		befriedigend					
Geographie und Geschichte		befriedigend					
Mathematik		befriedigend					
Naturgeschichte (Zoologie)		befriedigend					
Physik							
Chemie							
Geometrie, geometrisches Zeichnen, ebeneres Geometrie							
Freihandzeichnen		befriedigend					
Schnitzzeichnen		befriedigend					
Turnen		befriedigend					
Singen							
Gesang							
Sonstiges							
Ansonst. Punkte der schriftlichen Arbeiten		befriedigend				Erhält ein Zeugnis über das I. Sem. die Befriedigung z. B. II. Sem. d. B. . . . 18 . . . 2 . . .	
Zahl der verordneten Lehrstunden		5 . . . davon eine Beibringung		5 . . . davon eine Beibringung			

ムージルの成績原簿。BRG Steyr

ル<sup>(4)</sup>が兵器産業を興して以来、装甲車や軍用銃の生産によって栄えている。

ローベルト・ムージルの父アルフレートがシユタイアの国立鉄鋼産業専門学校・兼・試験場所長として赴任したのが一八八二年のこと。赤ん坊同然のムージル（一八八〇—一九四二年）は一等地の住居（居住面積一七一平米）で育ち、やがて小学校に通い、次いで実科学校に進学する。とはいえ半年後には、父の転勤に伴い一家はブリュン（ブルノ）に転居することになる。すなわちムージルは一八九〇年九月に実科学校に入学し、翌年一月末には、八年間住んだシユタイアを去る。

その成績原簿は今も実科学校に残っている。読者は、早くヒトラーの成績原簿を見たかと思われれるだろうが、残念ながらそれが無い。タイトルにあるとおり、成績原簿の湮滅がテーマなのだから。まずはムージルの成績原簿を見て、当時の実科学校がどんなものだったかおさらいしたい。ムージルなんか興味ない、とはのたもうなかれ。彼の『特性のない男』は二十世紀ベストのドイツ語小説<sup>(5)</sup>に選ばれているのだから。

まず進級判定の欄がある。「抜群の成績で第一級」とある。つぎが操行。「賞賛に値する」となっている。三つ目が学習

態度。「ねばり強い」と評されている。以上が総評である。

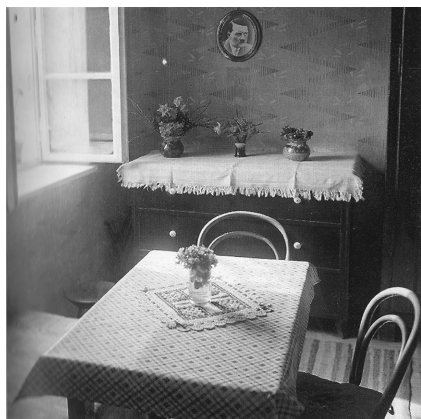
さて個々の科目の成績はどうだろうか。宗教「優秀 (vorzüglich)」、ドイツ語「賞賛に値する (lobenswert)」、フランス語「優秀」、地理と歴史「優秀」、数学「賞賛に値する」、自然史(動物学)「優秀」、自由画「賞賛に値する」、習字「良 (genügend)」、体操「優秀」、課題の文書の出来「丁寧」。これが九歳で入学して十歳で転校したムージルの成績である。評価の文字を見ると、筆跡もインクの濃淡も違っているの、各科目の担当教師が自筆で記入したことが分かる。

もう一枚、実科学校の「学事記録」がある。それによると一八九〇年／九一年度の一年生のBクラスは三十九名(うち留年生二名)。進級判定会議の結果が図表になっている。七段階の欄があり、最上段が「抜群の成績で第一級」、ムージルも含めて四名。つぎが「第一級」二十名、「第二級」五名、「第三級」三名。「再試験を許可する」、これは前期ゼロだが後期は五名(のちに述べるようにヒトラーはこれに該当した)。「進級を認めず」ゼロ。「進級判定以前に辞退」七名、これは留年を選んだことだろうか。とすると、「進級を認めず」と判定されると退学となるシステムだったのかもしれない。後期(第二学期)だけを見ると、三十九名中十四名が「辞退」しているので、じつに生徒の三十五パーセントが留年したことになる。往時のハプスブルクの実科学校は、なか

なかキビシイところだったようだ。

## 2

さてヒトラーである。彼が退学させられたのか、それとも追試により進級を認められたが自主的に退学したのか、もうこの点からしてはつきりしない。網羅的な『ヒトラー全記録』(二〇〇一年)<sup>6</sup>には「一九〇五年九月十六日、ヒトラー、シュタイアの実科中学校で、追試後、最終成績を受け取る。ヒトラーは母に実科高等学校での勉強継続を約束するが、望まずに、彼の学業生活は一六歳で終わりを告げた」とある。他方、ある程度信頼がおけると思われる、彼の親友クビツェクの『アドルフ・ヒトラーの青春』(一九五三年)によると、「成績は、やはりシュタイアでもだめでした。一九〇五年九月一日から十五日の間に再試験が行なわれましたが、結果は変わりません。相変わらず数学が「不可」で、さらに幾何も「不可」になりました」<sup>7</sup>。「十六歳の彼は決断を迫られていました。つまり、シュタイアの実科学校四年を留年するか、それとも完全に退学するかです」(K61)。クビツェクがリンツのオペラ劇場の立見席の常連としてヒトラーと知り合ったのが一九〇四年の万聖節(十一月一日)前後だったことから、翌〇五年の秋のヒトラーの状況を彼がつぶさに観察していたと考えてよい。つまりヒトラーは進級判定会議において五段



ヒトラーの下宿。1938年頃。Rauscher, Karl-Heinz: Steyr im Nationalsozialismus. Gnas (Herbert Weishaupt Vlg.) 2003. S. 15.

階目の「再試験を許可する」に振り分けられ、再試験の結果、二科目が不可となり、落第が決まったと推測される。クビツェクによれば幸か不幸かその秋、ヒトラーは肺炎カタルに罹って寝たきりとなり、母親クララもあきらめて、シュタイアで四年生をくり返すことはなくなったという。

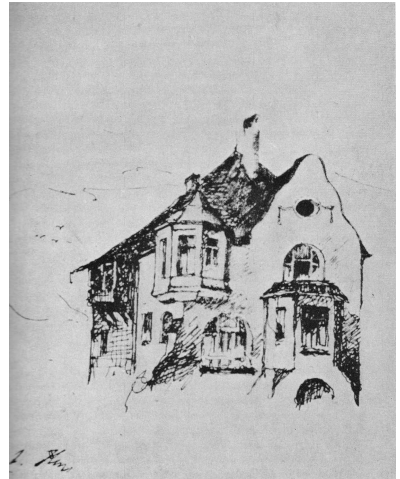
そもそもなぜヒトラーは、シュタイアの実科学校に来たのか。それまで在籍していたリンツの実科学校の三年次に数学とドイツ語で「不可」をもらい、ふつうなら留年だが「他の学校に移るなら四年生への進級は可能」とされた結果、より田舎の学校、つまりシュタイアの実科学校に転校して進級し

たのである（K58）。そしてその一年後に「田舎の」シュタイアでも落第すれすれだったらしい。これまでを総括すると、あっさりいってヒトラーは優秀な生徒ではなかった<sup>(8)</sup>。もちろんヒトラーは『我が闘争』ほかで、できないのではなくて、独自のスタンスが、ないし独特の性格があったために学校の授業になじめなかった云々と釈明している。かつて父アロイス・ヒトラーは息子を官吏にすると決めていたが、画家志望のアドルフと対決し、決裂していた。だがその父アロイスも一九〇三年に亡くなっていた。

日本でいえば高校一年生（途中で落第している）、年齢は十六歳）で進級をあきらめて、ニートをやっていたような男が、十七年後の大統領選挙で一二三万票を獲得したのである（第一位のヒンデンブルクは一八六五万票）。なぜこのようなことになったのか。政治的、経済的、歴史的、心理学的、精神病理学的分析や解説がきつと膨大にあるのだろうかここでは立ち入らない。親友クビツェクの回想と証言が、ヒトラーの奇妙な特性を書きとめているので、それに注目したい。まず異常な変革欲である。「教会の前で物乞いしている乞食を見ると、彼は乞食がいなくなるような国家の社会福祉について語りました。農家の娘が（…）セントバーナード犬に牛乳運搬車を引かせていると、彼は動物愛護協会の指導力不足をなじりました。サーベルを下げた二人の若い士官が通り

をぶらぶら歩いていると、彼は(…)軍の怠慢に憤慨しました。彼はあらゆる存在物に満足せず、常に変革しようとする気質で凝り固まっていた( K73)、「既存のものを何でも変えたい」( K131)という欲求は、当時の世代に共通するものだったかもしれない。しかしこれは父アロイスの「じつとしていられない性格」( K73)が息子にあらわれたものだ、とクビツェクは考える。住居移転、結婚や再婚においても、アロイスは常軌を逸していた(10)。息子を役人にする、というアロイスの執拗な方針は、アドルフをどんな危険が待ち受けているかを薄々知っていたからだというのがクビツェクの説である。

次の特徴は、基礎の無視である。「数学をヒトラーは憎んでいました。(…)厳格な体系的作業が必要だったためです」( K81)。「私たちはいつも音楽的問題に関する話をしていましたが、そうしているうちに彼は驚くべき早さで音楽の専門用語や表現を身につけていきました。(…)体系的に勉強したことがないのに、彼はあらゆる問題について語っていたのです！」( K110)。とはいえ、のちにマリボル(現スロヴェニア)市立劇場の副指揮者となるクビツェクと楽器について技術的な話をする段になると、ヒトラーはまるで無力だった。「そのために必要なのは、体系的な勉強、絶え間ない練習、忍耐、勤勉であり、これらはどれも彼の苦手なものでした。



ヒトラーのペン画。リンツの新築住宅がモデル。見事なまでに基礎が欠けている。Kubizek (原書) S. 177.

(…)彼の考えによれば、優れた理解力と想像力、それに断固とした自信があれば、重要ではない要素を補うことができるといいます( K110)。その自信はしかし、ヒトラーがクビツェクのヴィオラを顎にはさんで弓を取るという一瞬に崩壊した。ヒトラー自身、その事態に茫然としていたという。また、ヒトラーはピアノのレッスンを受けた。「おそらく短期間でピアノを完全にマスターするつもり」だったが、これも挫折した。「プレヴラツキー先生は、直感的な把握とか天才的な即興など無価値と見なしていました」( K111)。ヒトラーのやり方は、いわば「横入り」であり「なり済まし」ではなかったか。弁舌の才は天賦のものであったろうが、雄弁と



いつても、誠実に史実と向き合う訥弁を圧倒してその場で辻褄を合わせる狡猾さと区別するのはむずかしい。

最後の特徴は、決して他から学ばないということ。ヒトラーは学校をやめたあと、ウィーン宮廷図書館などから大量の本を借りて、「独学」で知識を仕入れたのだが、クビツェクの印象によれば、「自己啓発というよりは自己確認の意味合いの方が強かった」(K 283)。つまり他から新たに指針や発想を学ぼうとするのではなく、すでに自分のなかにあるものを本によって再確認しようとした。

ナチスがドイツを席卷するとき、ムージルはそれを「脱誠実化 Enternstung」<sup>(1)</sup>と呼んだ。

昔も今も「尊敬される学歴の持ち主でない」首長が、熟慮の末にはなく、本人の思いこみから、逸る思いを押さへきれずに「不退転の決意で」断行するとき、国は道をあやまる。

## 3

ゲシュタポがいつ、どのように成績原簿を破棄したのかは分かっていない。一九三八年三月のオーストリア併合とともに、シュタイアの実科学校長ゲオルク・ホルツァーは罷免され、アントーン・ノイマンが着任した。このノイマン校長が湮滅したとは考えにくいので<sup>(2)</sup>、実際にゲシュタポが来て任務を果たしたと思われる。二〇一三年に創立一五〇周年を

祝ったシュタイア実科ギムナージウムの校長室に、ヒトラーの成績原簿がないことは確かである。そしてもう一枚、生徒本人に渡す成績表が存在するはずだが、それについてはヒトラーが総統本部のテューブル・トーク(一九四二年一月八日―九日)で次のように語っている。

…：僕たちは成績表をもらったので、帰郷するところだった。(…)僕たちはこっそり農場の酒場に行き、どんちゃん騒ぎをして飲んだ。それがどんなものだったか、僕は覚えていない。あとから想像するほかはない。成績表はポケットに入れておいた。翌朝、僕は牛乳配達の人に起こされた。シュタイアからガルステンに向かう途中で僕を見つけたんだ。

ひどい格好だった。大家の奥さんは「おやまあ、アドルフ、なんて格好をしてるの!」と言った。風呂を浴び、ブラックコーヒーを一杯もらった。それから大家さんは「いったいどんな成績をもらったの?」と聞いた。僕はポケットを探った。成績表はなかった! なんてことだ! 母に見せなければならぬのに! (…) 大家さんは僕にきつく言った、「ほかに道はないわ、すぐに学校に行つて、成績表の写しをもらおうのよ。ところでお金はもっているの?」「もうないです」——彼女は五グルデンをくれた。

僕は学校に行った。校長はまず僕を待たせた。じつは成績表はこの間、学校に届けられていたのだ。ほうっとして、僕は成績表をトイレット・ペーパーととり違えたのだ。じつに気の滅入る事件だった。校長が何を言ったか、とても話す気にはなれない。思い出してもぞっとする。死ぬまで酒は飲みません、と天に誓った。かくして僕は写しを手に入れた。(…)それから意気揚々と帰郷した。それほど意気揚々というわけではなかった。なにしろ成績表は、そう素晴らしいものではなかったのだから<sup>13)</sup>。

——きわめて疑わしいスピーチである。成績原簿はA3版の大きさであり、写しも同じ大きさだったか、やや小さくともA4はあったと思われる。それをポケットに入れ、さらにトイレット・ペーパーと間違えることがあるだろうか。それはともかく、生徒ヒトラーが受け取ったと称する成績表は、(存在するとしても)ヒトラーが公表しなければ誰も見るわけにはいかない。学友とどんちゃん騒ぎをしたというのだから、進級が決定したらいいのだが、それを裏付ける資料もない。ヒトラーとしては、自分のあまりパツとしない学歴についてこれ以上穿鑿(せんさく)を受ける恐れはないと考えてよかった。

ところが一九三七年、つまりゲシユタポによる湮滅の一年前に、ユダヤ人のジャーナリスト、コンラート・ハイデ

ヒトラーの成績原簿の写し。コンラート・ハイデン『アドルフ・ヒトラー、反ヨローバの男』(原書)の付録。

*Schulzeugnis* II

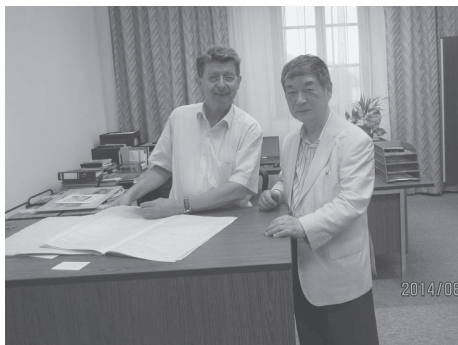
Vorg. 6		Schulzeugnis Schuljahr über Schuljahr	Kategorie des Schülers
Vorname	Adolf	1. Sem. gut	III
Nachname	Hitler	2. Sem. gut	
Tag d. Geb. 12 April 1889		Motivation	
Geburtsort Braunau a. Inn			
Tätigkeit (Schulberuf)			
Religion (Katholik)			
Mutter			
Vater			
Vormund			
T. 1			
T. 2			
T. 3			
T. 4			
T. 5			
T. 6			
T. 7			
T. 8			
T. 9			
T. 10			
T. 11			
T. 12			
T. 13			
T. 14			
T. 15			
T. 16			
T. 17			
T. 18			
T. 19			
T. 20			
T. 21			
T. 22			
T. 23			
T. 24			
T. 25			
T. 26			
T. 27			
T. 28			
T. 29			
T. 30			
T. 31			
T. 32			
T. 33			
T. 34			
T. 35			
T. 36			
T. 37			
T. 38			
T. 39			
T. 40			
T. 41			
T. 42			
T. 43			
T. 44			
T. 45			
T. 46			
T. 47			
T. 48			
T. 49			
T. 50			
T. 51			
T. 52			
T. 53			
T. 54			
T. 55			
T. 56			
T. 57			
T. 58			
T. 59			
T. 60			
T. 61			
T. 62			
T. 63			
T. 64			
T. 65			
T. 66			
T. 67			
T. 68			
T. 69			
T. 70			
T. 71			
T. 72			
T. 73			
T. 74			
T. 75			
T. 76			
T. 77			
T. 78			
T. 79			
T. 80			
T. 81			
T. 82			
T. 83			
T. 84			
T. 85			
T. 86			
T. 87			
T. 88			
T. 89			
T. 90			
T. 91			
T. 92			
T. 93			
T. 94			
T. 95			
T. 96			
T. 97			
T. 98			
T. 99			
T. 100			

Schulzeugnis Hitlers von 1905  
Auszug aus Hauptkatalog

ン<sup>14)</sup> (「ヒトラーの最初の敵」)がスイスで彼の伝記を出版し、その付録に手書きで書き写したヒトラーの成績原簿が載っていたのである。

この手書きの成績原簿は、先述のムージルの原簿とほぼまったく同じ書式になっており、おかげで解読は容易だった。家族状況、本人の状況など注目すべき点はいくつかあるがここでは触れない<sup>15)</sup>。

進級判定の欄は、前期が第二級だったが後期は「第一級」となっている。操行「良 (behredigend)」(5段階の3)、学



シュタイア実科ギムナージウムの校長室で、ローベルト・ムージルの成績原簿（1891年）を閲覧する、ゲーベスフーバー校長と筆者。

#### IV. Klasse.

1. Bachleitner Rudolf aus Steyr.
2. Brandstetter Ludwig aus Wien, N.-Ö.
3. Eder Franz aus Königswiesen.
4. Ehler Karl aus Steyr.
5. \*Heindl Wilhelm aus Steyr.
6. Hitler Adolf aus Braunau a. I.
7. Höflinger Ferdinand aus Steyr.

学事記録1904/05、第4学年、6に Hitler Adolf aus Braunau a. I. とある。

習態度「十分な (hinreichend)」、以上が総評である。個々の学科の成績は、宗教「良」、ドイツ語「可 (genügend)」(5段階の4)、フランス語「可」、地理と歴史「良」、数学「可」、化学「可」、物理「可」、幾何学「可」、自由画「優秀」、体操「優秀」、唱歌「良」、課題の文書の出来「丁寧とはいえない (minder getätigt)」となっている。ただし幾何学については、まず「不可」とあり、補注で「再試験を許可する」となっている。さらに幾何学の「可」に補注があり、「再試験による」とある。ハイデンによる成績原簿の写しを見る限り、ヒ

トラーが再試験で挽回できたのは幾何学だけである<sup>16</sup>。この幾何学を担当したのがゴルトバハー<sup>17</sup>であり、一九三八年のオーストリア併合時には、ヒトラーの報復を恐れてかなり見苦しい迎合を行なったらしい。

ともあれ、このどうやらやっとな進級が認められた生徒ヒトラーが、二十三年後には、かつて「抜群の第一級」で進級した先輩ムージルの著書を（間接的ながら）禁書に指定することになる。スイスに亡命したムージルは、貧窮のなか、ライフワークの「特性のない男」を完成することなく客死した。

シュタイア実科ギムナージウムの校長室で、ハイデマリ・コロン女史は「郷土史家の」シマンコさん<sup>18</sup>が、ひよっとすると一九〇四／〇五年の学事記録 (Jahresbericht) にヒトラーの名前が載っているかも、と言っているのですが」とゲーベスフーバー校長に語った。校長はそれを知らなかったが実際、それは存在した。

「Hitler Adolf aus Braunau a. I.」とは、イン川畔のブラウナウ出身のアドルフ・ヒトラーのことである。大判の成績原簿と学事記録は別の冊子になっており、ヒトラーの成績を湮滅せよ、という密命をおびたゲシュタポは、成績原簿のみを破壊していたのである。これはヒトラーが、学事記録は温存せよと指示したのかもしれない。一九三八年当時、実科学校四年次修了というのは、むし



る希有な学歴だったと考えられる<sup>19)</sup>。親友クビツェクは高等小学校卒業だった。学校教育と教師を徹底的に嫌っていたヒトラーだったが、それでも自分の学歴はドキュメントとして残しておきたかったのだろうか。それとも、シユタイアにある痕跡をすべて湮滅するようにとの指示を受けたゲシユタボが、うっかり学事記録の破棄を忘れたのだろうか。一九三八年三月に歓呼に迎えられてブラウナウからリンツを経てウィーンに向かったナチスは、シユタイアを迂回したし、ヒトラーは生涯、シユタイアを再訪することはなかったのである。

#### 《参考文献》

- 1 Gestapo. Geheime Staatspolizei の略。ナチスの秘密国家警察。
- 2 オーストリアの成績表示は一般的に1が秀、2が優…と続き、4が可、5が不可となる。
- 3 女性実業家や職業婦人などで構成される女性のための国際的な社会福祉団体 (Socioplist International) に所属する会員。「女性にとって最善のもの」の意を表すラテン語から。ソロプティミスト・シユタイアは二〇一三年にムージルの旧居に記念銘板を設置した。筆者は二〇一四年八月にシユタイアの実科ギムナージウムを訪問した。
- 4 Josef Wendt (1831-89) 普墮戦争 (一八六六年) の敗因の一つは、プロイセン軍の後装銃に対してオーストリア軍が初期の後装銃だったことである。ヴェアンドルは後装銃のための聖櫃式遊底 (Tarnackelverschluss) の発明によりレミントンを抑えてオーストリア軍の大量の発注を受けた。往時従業員一万五〇〇〇名を有するヴェアンドルは、ヨーロッパ最大の兵器工場だった。現在多くの国の歩兵の標準装備であるマシンガン、ステアーAUGはシユタイア製モデルである。
- 5 一九九九年、千年紀の転換にあたって、ミュンヘン文学館とベルテルスマン出版社が共同でアンケート調査を行なった。三十三人の小説家、三十三人の批評家、三十三人の大学教授に二十世紀でベストの小説は何かと質問した。一位がムージルの『特性のない男』(三十五票)、二位がカフカの『訴訟』(三十二票)、三位がトーマス・マン『魔の山』(二十九票)の順だった。
- 6 阿部良男著。柏書房二〇〇一年、十七頁。阿部は三〇〇〇冊をこえる文献からこの『全記録』を作った。文献同士の齟齬については「メモ」の形で併記している。
- 7 August Kubizek: Adolf Hitler Mein Jugendfreund. Graz (Leopold Stocker Verlag) 1953. ungekurzte Sonderausgabe 2002. S. 58. 邦訳は橋正樹(三交社『アドルフ・ヒトラーの青春』)による。(以下Kとする。原書を参照して部分的に筆者が別の訳を充てている箇所もある。)
- 8 クビツェクは自分宛のヒトラーの葉書や手紙にある、ヒトラーのドイツ語の正書法上の間違いに言及している (K 59)。
- 9 「現実を破棄する」ことを提案するウルリヒ(『特性のない

- 男』の主人公)を連想することもできる。ただしムージルの場合は哲学博士論文で取り組んだマッハ説をとおして得た認識批判論を踏まえている点で、ヒトラーとは違っている。とはいえヴェルサイユ体制やヴァイマル共和国の惨状に苦しむ世代には共通する感覚であったかもしれない。
- 10 ブラウナウ時代は十二回以上の転居。パッサウでは二年間で三回転居。退職後はリンツからハーフェルト、ランバッハ、さらにレオンディングに引越し。最初の妻アンナは十四歳年上、二番目のフランツィスカは二十四歳年下、クララ(母)は二十三歳年下だった。
- 11 *Enternstung* を筆者は「脱深刻化」と訳したことがある。国会議事堂放火、共産党員弾圧などに対して、一般市民が「大したことではないな」と反応したことをムージルは *Enternstung* と評した。政治が崩壊に向かうとき、政治家のみが変性するのではなく、有権者、市民の側もまた連動して変性、衰弱する。拙論「脱深刻化 (*Enternstung*)」という敗北の形「中央大学人文研紀要第七八号、二〇一四年一八一—二〇七頁参照。
- 12 Anton Neumann (1885-1964) は戦後副市長に選出されており、ナチス・シンパだった可能性は低い。
- 13 Karl-Heinz Rauscher: *Steyr im Nationalsozialismus*. Gras (Herbert Weishaupt Verlag), 2003. S. 14f. 典拠は *Steyr-Rauscher 14'* Adolf Hitler, *Monologe im Führerhauptquartier 1942-1944*. Die Aufzeichnungen Heinrich Heims, hrsg. von Werner Jochmann を挙げてゐる。奇妙な(な)このスビーチは、増補改訂版の Henry Pöcker: *Hitlers Tisch-Gespräche im Führerhauptquartier*. Wiesbaden (VMA-Verlag) 1983 に収録されていない。
- 14 Konrad Heiden (1901-1966): *Ein Mann gegen Europa*. Zürich (Europa-Verlag) 1937. ハイデンは一九三七年に市民権を剥奪されている。
- 15 ドイツ語の読める方は、中央大学人文研紀要第七九号の拙論を参照されたい。
- 16 『国家社会主義の渦中のシュタイア』(二〇〇三年)には、ヒトラーは四科目(ドイツ語、フランス語、数学、速記術)で不可を取ったが、追試験の結果とにかくすべての不可を解消した、となっている。Karl-Heinz Rauscher (原注13) S. 16.
- 17 Gregor Goldbacher 1875-1950. 方言詩人、郷土史家。シュタイア実科ギムナジウムの校舎の入口横に記念銘板がある。
- 18 Ernst Schinanko. シュタイアの郷土史家。ムージル研究にも多大な貢献がある。
- 19 父方の祖先は、かなり複雑な家系だった。アドルフを役人にしようとした父が死んだあと、後見人等の後押しもあり、ヒトラーは上級の学校に進学できた。
- ※ なお引用文中の差別的表現には傍点を付した。
- (理工学部教授 ドイツ語)